



日本カトリック海外宣教者を支援する会

巻頭言

二十年の宣教活動

神言修道会 佐藤 新

私が初めて OTP (Oversea Training programme) の神学生としてケニアへ行ったのが 2000 年、そこで二年弱の司牧実習を経験して日本に戻り、残りの神学の勉強を終えて司祭叙階、そしてまたケニアに派遣されたのが 2003 年の終わりの頃ですから、それからおよそ二十年が過ぎたことになります。あつという間だったような、それでもやはりいろいろあったこの二十年の宣教活動には、毎日触れ合う信徒の皆さん、教会に来る青年たちや子供たちが、彼らの人生の中での様々な喜び、悲しみ、そして困難の中にあって守り続ける神様への信頼と、その彼らの力強い姿に励まされる自分があります。

さて、私が派遣されているケニアとそしてその隣の国タンザニアは、地続きの国境をもつ二つの国ですが、神言会としては一つの管区です。どちらの国でも使われているのがスワヒリ語という言葉で、それに加えて特にケニアの都市部では英語も使われています。日本でもジャンボとか、ハクナ・マタタとかいうスワヒリ語を耳にされたことがある方もおられることと思います。スワヒリ語の発音は日本人からすると案外とつきやすく、カタカナで書いたものをそのまま読めば、なかなか流暢に話している風に聞こえます。

♥♥ もくじ ♥♥

巻頭言	1
第 86 回運営委員会議事録	2
宣教者からのお便り	4
ザ・メッセージ	11
ECHO	12
連載「海外宣教」	14
新入会員・事務局より	16



神言会はこの二つの国の中にある三つの地区で、十一の小教区と、養成のための三つの神学校を持っています。私は司祭に叙階された後にこちらに派遣されて以来、いくつかの小教区で宣教活動をしてきましたが、二年前から日本でいう志願院（修練期に行く前に哲学を勉強している神学生たちの住むところ）で暮らしています。

こちらの小教区でも様々な活動がありますが、私たちが特に大切にしているのは、子供たち、若者たちを含めたすべての信徒が主体になって、その活動に関わり、それを通してキリストの愛、神からの恵みである平和をまず自分たちの間に実現させること、そしてその素晴らしさ、美しさを、私たちの生き方を通してまだキリストを知らない人々に伝えることです。

例を挙げると、日本だと教会学校にくる位の年頃の子供たちは、PMC（Pontifical Missionary Childhood）というグループの中で、聖歌隊、朗読者、典礼の中での踊りなどを含めた子供のミサの準備をしたり、その地域にある孤児院やあるいは障害のある子供たちを訪問したり、時には近隣の小教区のグループと合同でのスポーツ大会を企画したりと、一年を通して様々な活動で盛りだくさんです。青年会も、活動が少し異なりはしますが、やはり自分たちの間から選ばれたリーダーたちと、いろいろなことを企画し、行っています。私は彼らの傍で、彼らがいろいろないろいろな問題・挑戦を乗り越えながら歩む姿を見て、そこにこれからの教会の姿、生きる力に満ち、前に向かって歩み続ける教会があることを確信しています。

コロナの問題でこういった活動がかなり制限された状況から、また少しずつ以前のような、あるいはそれ以上に、様々な活動を通して多くの人たちをキリストのもとに招き、そこに来るすべての人に愛をもって受け入れる教会の姿を保ち続けることができるよう、いつも神様にお祈りしています。

現在私が住んでいる志願院の神学生たちを含め、ケニヤ・タンザニア、そしてアフリカで神の呼びかけに答えようと努力している若者たちのために、皆さまのお祈りをよろしくお願いいたします。

第 86 回運営委員会議事録

日 時：2022 年 9 月 10 日（土） 15:00 ～ 15:40

場 所：ズーム会議 参加：運営委員 10 名 欠席 3 名

議 事

I. 「きずな」160 号について

編集者から→今回は久しぶりに 24 ページということで、コロナということですが、宣教者の方々から長文を頂き、また運営委員の方々からも様々なコメントを頂いたので、充実していたと思う。

意見：24 ページということで読み応えがあった

II. 「きずな」161 号の巻頭言と「海外宣教者のお話を聞く会」

12 月号になりますが、神言修道会ケニヤ宣教の佐藤新神父にお願いする。

Ⅲ. 援助申請

アフリカ、チャド Sr. 平静代より

- ① 会の敷地にある学校や幼稚園のためにある手動のポンプ 2 本の鉄管の錆に苦勞して
いて腐食しない管に交換する費用と工事費の援助

・整備工事費と管 2 本分費用 610,000F (CFA フラン)

・セメント購入とその他経費 100,000F

合計 710,000F → €1,082 → ¥155,191

・現地ガールスカウト活動の女子に識字率向上、衛生指導、栄養指導等の為「料理と家事」4 か月研修の費用 1950,000F

◎次に伝えていくためにも核となる人員の養成費として

・発電機、冷蔵庫など整備設置費他を 2712,000F

合計 4662,000F → €7107.18 → ¥1,019,382

2022 年 9 月 2 日現在 1€ → ¥143.43 として

- ② ブラジル モジダス クルーゼス 松尾繁詞神父 (OFMConv.) より亡くなった長山
武一神父 (神言修道会) の替わりに山本伊三男神父 (日系人神父) が巡回するためのガ
ソリン代を 1 年分願いたい。黙想の家の収入がゼロのため活動ができない

1 か月 US\$120 → 1 年分 US \$ 1,440 1 \$ → 143.07 → ¥206,020

すべて承認された。

Ⅳ. その他

・運営委員会開始時間の変更 賛成多数可決 3 か月毎、第 2 土曜 1 3 時半開始

・東京教区大司教様お話会について 11 月 19 日 10:00 ~ 11:20 zoom

皆様のご参加をお願いします。

・コロナ禍により瀬田発送は業者発送に変換された。

各ボランティアには村上会長から今までの労をねぎらうお手紙とカードが送られた。

・きずな国内業者発送 2,860 件

・きずな事務所発送 ボランティア 2 人で海外 107 件、国内大口その他 69 件

・雑誌海外事務所発送 ボランティア 1 人で 45 件

次回運営委員会は 12 月 10 日 13 時半より、集合リモート会議かは 11 月の状況にて
判断し決定、伝達。



宣教者からのお便り



フィリピン

◆マロロス◆

鶏とクリスマス

慰めの聖母の聖アウグスチノ修道女会 奥田久子

2022年6月より、ルソン島中部ボラカン州マロロス市にある修道会の運営する学校、La Consolacion University Philippines に赴任しており、学校の敷地の一部の小さな農園で、鶏、チャボ、ホロホロ鳥、そしてアヒルの世話を手伝っています。メスの鶏たちは採卵用に飼育し、オスの鶏たちは食用に育てて修道院で頂いています。また、8月下旬に新学期が始まり、私は12年生（日本の高校3年生にあたる）に宗教を教えています。授業では、神様の創られた自然界における人間の役割や、環境問題について生徒たちと話し合っています。

鶏の飼育に関してインターネットでいろいろ調べていくと、養鶏場における、パタリーケージという過密な環境で飼育されている鶏の実態や、孵卵場における、採卵用に孵化される鶏の雛のうち、卵を産まないオスのひよこのほとんどが孵化直後に殺処分される等の現状が見えてきます。ドイツやフランスをはじめ、ヨーロッパ各国でひよこの殺処分を規制する法体制が整ってきているようですが、日本やフィリピンを含む世界のほとんどの国で、不要とされる大量のひよこの処分については、野放しの状態ではないのでしょうか。殺処分の方法は、生きたま

ま高速の粉碎機にヒヨコを入れる、ビニール袋やプラスチック容器に詰め込んで窒息死／圧死させる等、非常に残酷です。殺処分後は家畜類の飼料として活用されるとはいえ、人間の生活環境を直接的に脅かすものでもない生物を、飼育するとビジネス的に採算が合わないという理由で処分していいのか、神の被造物に対する尊厳という観点から、大きな問題を孕んでいます。鶏肉や家禽類（鶏やアヒル）の卵を使った料理はフィリピンの食文化に深く根付いており、身近な食材の裏にある、ひよこの殺処分の問題について、「オスのひよこを買って育ててあげたい。」「フィリピンでも法律でひよこの殺処分を禁ずるべきだ。」等、生徒たちから具体的な意見や提案が活発に出てきています。

鶏たちは一羽一羽の個性がとても豊かです。鶏小屋に私が行くと、すぐに私の頭のベールの上に飛び乗ってくる馴れた鶏もいれば、ちょっとでも私が触ろうとすると逃げってしまう臆病で警戒心の強い鶏もいます。鶏たちの個性に触れ合いながら、毎日当たり前のように食事として頂いている卵や鶏肉のうちに、被造物の命の尊さと有難みを感じられるようになってきます。「動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。」（創世記9章3節）と、神様はご自分の創られた自然界の命を私たち人間の生存のために与えてくださっています。人間に対する神様の愛は、この自然界の命の恵みに深く示されていますが、御子イエス・キリス

トというお方こそ、その神様の愛の最大限の表れと言っていいでしょう。被造物の命を私たちに食糧として与えるだけでなく、神様はご自分の最愛の御子を私たち人間の救いのために与えてくださっています。ごミサでご聖体を頂く度に、十字架上で私たちのためにご自分を捧げられたイエス様のうちに示された神様の愛を私たちは賛美します。

確立された安易な消費システムのうちに多くの人間は無意識のうちに取り込まれてしまっており、修道院で生活していても、それは例外ではありません。被造物への尊厳ある関わり方に関して、消費システムの背後に隠れている様々な問題は、意識して調べなければ現状を知ることでもできず、解決策へと働きかけることもできません。御子イエス・キリストのご誕生をお祝いするこのクリスマスの季節、日本ではフライドチキンやローストチキン等、鶏肉を使った料理がお祝い気分を盛り上げ、フィリピンでは、12月24日に夜半のご降誕のミサに与り、その後、ノッチェ・ブエナ（Noche Buena）と呼ばれる、パスタやケーキ等の夜食を用意してクリスマスをお祝します。クリスマスを彩る様々な食材が、自然界の命の恵みからきていますが、この命の恵みは、飼育やその他の過程に



自然豊かな環境での活動

において、神の被造物としての尊厳や敬意をもって扱われているのでしょうか。このクリスマスの季節が私たちにとって、消費システムの背後に潜む様々な問題を知って、日々の消費生活を



シスター奥田久子

見つめ直す機会となりますように。被造物の命に対する関わり方が、真に神様の愛に応える形となるよう、私たちの生活が変容されていきますように。

ボリビア

◆サンタクルス◆

海外宣教への熱い思い

イエスのカリタス修道女会 川 下 ゆかり

10月、ロザリオの聖母と宣教にささげられた月ですが、ロザリオの祈りは、イエス・キリストの生涯と宣教生活の黙想へと導びき、宣教への思いは、遥かなる地平線へと駆け巡ります。

さて、イエスのカリタス修道女会の創立者アントニオ・カヴォリ神父は、イタリア人のサレジオ会の宣教師で、1972年11月22日に、日本の土となり、この2022年は、帰天50年を記念しています。カヴォリ神父は、諸国民への宣教の熱い思いを抱き、カリタスの娘たちを韓国、南米へ派遣しました。今は、16ヶ国で、「憐れみ深い人は幸い（マタ5,7）」「全世界に行って、福音を宣べ伝えなさい。マルコ16:5」をモットーに、イエスのみ心の愛ーカリタスの使徒として、すべての人の救霊のため活動してい



ミサに与るオキナワ・コロニーの方々



オキナワ・コロニーの子供たち

ます。派遣国の一つであるボリビア多民族国は、南米の中心、臍とも心臓とも言われ、多彩な自然環境と資源に恵まれ、色彩豊かな民族衣装やフォルクローレ音楽、古くより続く民間信仰など、特色ある多民族文化が魅力で、カトリックの信仰も篤い国です。私たちのボリビアでの宣教の歴史は、2022年12月12日で、58周年を迎えます。ボリビア宣教初期のカリタスの修道女たちは、まさに、教皇フランシスコの言葉の通り、「野戦病院の宣教」に献身し、命のみことばと宣教魂をもって、東奔西走しました。開拓に明け暮れた沖縄からの移住者たちのオキナワ・コロニーで、家庭集会を行うために、幻灯機をもって、夜道のジャングルの中、ジープを走らせたり、大雨が降って、川なのか道なのかかわからない泥道を雄々しく家庭訪問したり、ラジオを使っの広報宣教、ガリ版の教会新聞で

神様のみことばを伝えたり、日本語や家庭科、宗教を教え、家庭の使徒職で、人々の苦しい生活に寄り添い、支え合い、苦楽を共にしました。このオキナワ・コロニーの宣教において、海外日本人宣教女を支援する会様には、16の村を駆け巡るため、ガソリン代をご支援いただいたことを思い出しています。大変助かっていました。

月日は流れ、オキナワ・コロニーの移住者たちもボリビアに土着し、2世3世の時代となり、信仰生活も独り歩きを始めたころ、宣教女や新しい召命の減少で、修道院は閉鎖したものの、元修道院の家屋を借りて、現在は、月に1～2回ぐらいの割合で、数日間の出張宣教を行っています。コロニーの家庭訪問では、素朴で、心温かい「しまんちゅ」（沖縄県民）の人々が、喜んで迎えてくれます。そして、ボリビア人たちも明るい笑顔で、気軽に声をかけてくれます。ある日のこと、オキナワ・コロニーのほこり高き泥道で、むさくるしいおじさんが、ニコニコ顔で、「シスターアタナシア」と声をかけてきました。「僕のこと憶えてる？マリオだよ！初聖体で教えてもらったマリオだよ！」もう30年以上も前のこと、「ごめんね、もう昔のことはよく覚えていないのよ」と高齢のシスターアタナシア。「うれしいな！シスターに会えて！またね～」と風のように去っていきました。沈む夕日で赤く染まった地平線を見つめながら、宣教女たちの蒔いた神様のみ言葉と愛の種が、このボリビアの土壌で、すくすく育ち、カリタスの証しが、息づいていることに感動し、感謝した一コマでした。神の現存を感じさせる雄大で美しい自然の中で、心優しい人々ととも

に、主を賛美し続けることができますように。

東ティモール

◆ディリ◆

ナロマンの活動が再開

聖心侍女修道会 西 川 久 美

東ティモールは、19歳以下の子供が人口の半分以上を占める若さにあふれた国ですが、5歳以下の子供のうち、約半分以上が栄養不良に陥っている状態です。今年ティモールは独立20周年を祝いました。しかし、独立当時から現在に至るまで、この乳幼児の栄養不良の割合は変わっていません。

このような状況に少しでも応えたいと、「聖ラファエラ子供の家——ナロマン」は2019年7月より首都ディリで始まり、現在に至ります（ナロマンは現地の言葉で光を意味します）。ここでは、5歳以下の栄養不良の子供を持つ母親（もちろん父親も）たちが、1週間のプログラムで栄養について学び、子供たちの健康の向上を図るものです。現在はディリからのみ参加者を募っていますが、母親たちが栄養について必要な知識を得、たとえ貧しくても子どもたちのために何が必要か、何ができるかを考えることができるようになることを目標にしています。

しかし2020年3月にティモールで最初のコロナ感染者が出て以来、緊急事態宣言、ロックダウンが繰り返され、その間私たちもこの栄養事業を中断せざるを得ませんでした。一方でこの長期にわたるコロナ過の状況は、これまで見えなかった多くの現実を認識する機会となりま

した。多くの人々が生活に困窮し、失業、食べ物にも事欠く人が増加しました。貧富の格差がより一層明らかになり、それに加えて感染が増加し始めた2021年の丁度復活祭に起こった大雨と洪水災害がティモール全土に被害をもたらした。40名以上の死者と多くの被災者を出しました。人口が密集し、災害への備えなどないディリでも川の氾濫や道路陥没などの被害をもたらした。特に打撃を受けたのは地すべりの多い山裾や、川岸などに非合法に生活する貧しい人々の住む地域でした。

ディリでは多くの人が住いや持ち物をすべて失い、半年以上もの間避難所での生活をしなければならぬ人々もいました。このような状況の中で、様々な方からティモールのために支援をいただき、ナロマンでも何かできないかと考え、2020年から21年にかけて3回ほど、過去にこちらのプログラムに参加した家族を対象に、その家庭を訪問し、子供たちの栄養状態をチェックし、コメなどの支援物資を配布することを始めました。多くの家族はディリでの生活が難しく、地方に帰っていましたが、ディリに残っている約160家族を訪問することができました。子供たちの中には栄養状態が以前より悪くなっているケースも見られました。

大家族での生活、ティモール特有の冠婚葬祭などにおける習慣も多く、多くの支出を伴い、家庭を圧迫ということも聞いています。これらの要素も栄養不良児の多さに表れているように思います。ティモール人の誰をも受け入れる寛大さ、おおらかさの一方で、食生活、教育など日常生活を犠牲にせざるを得ない難しさがあります。

現在ティモールではコロナ感染もほとんどな

くなりましたが、物価の高騰、失業率の多さは続いています。コロナ過の中で、私たちも何が彼らにとって本当の支援となるのかが大きなチャレンジを投げかけられました。現在ナロマンの活動は再開されていますが、それぞれの家族が貧しさや困難の中で何ができるのか考え、子供たちに必要なものを与えられるよう、私たちがより深く彼らと連帯し、同伴することが求められているように感じています。

日本 ◆東京◆
一宣教女の一言

サレジャン・シスターズ マリーザ・ガンバート

「海外宣教」"Missione Ad Gentes"と言う言葉は、イタリア語では教皇が話される言葉として使います。この言葉を正確に訳すのはいつも難しさを感じます。確かに「海外宣教」ですが、「場所」よりも「人」を指すからです。「Gentes（ジェンテス）」はラテン語で、「あらゆる人種の人々、諸国民」という意味があります。もっと広く、深い意味があります。確かにイエスは「全世界に行きなさい」と言われました。ですから「海外」と言う言葉も間違いないのですが、次に福音には「すべての人を弟子にしなさい」と続いていますので、やはり「Ad Gentes」、「すべての人のために」イエスから派遣されたものです。その自覚が一番大切だと思います。

わたしが一つ感じるがあります。昔も今も、出て行く人は、自分の国、自分の文化の富をもって出かけてはいけない、むしろ、福音の

素朴さ、貧しさをもって出かけることが大切です。自分の文化、見方をもって行く誘惑、危険がいつもあります。日本ではありませんが、最近、宣教地に出発する人の話を聞く機会がありました。やはり、自分が派遣されているところの批判をしていました。その方は自分の考え方、やり方にこだわりがあるように見受けられました。それは、ある意味で仕方がないことだと思いますが、できるだけ、小さなことでも自分の文化にこだわらないことを身に着けて行くように求められています。教皇フランシスコが、「世界宣教の日」にあたってのメッセージの中で言われるように、宣教者は自分ではなく、復活されたイエスを伝えて行くのです。「キリストの宣教者が遣わされるのは、自分のことを伝えるためでもなければ、自分の説得力や管理の腕前を見せつけるためでもありません。[……]最初の使徒たちのように、ことばと行いによってキリストを示し、喜びと率直さをもってその福音をすべての人に告げるといふ、崇高な榮譽に与っているのです。」(2022年「世界宣教の日」教皇メッセージ)

自分を振り返って見てもそう思います。日本に来て46年がたっています。自分の文化にこだわっていないと思っていますが、まだ実際にあるのだと度々気づきます。

今、わたしの宣教使命は修道共同体の中にありますが、できるだけ、「出かけていく」姿勢を大切にするようにしています。教会全体、教区、小教区で行われている生活、活動に関心を向け、また、周りにいる姉妹もそうするように促しています。

わたしが忘れたくないのは、教会の中で、ど

んなことをしていても自分の宣教者としてのアイデンティティ、キリストの忠実な証人として生きることです。

東ティモール

◆ディリ◆

コンテナの教室

聖マリア修道女会 荒井 祥恵

先日の支援は現在作成中のコンテナ製の教室のために使わせていただきました。とてもシンプルなものですので、写真で紹介させていただきます。



コンテナ製の教室内部



コンテナ製の教室外観



コンテナ製の教室がほぼ完成



組み立て中のコンテナ製の教室

レオナルド松尾神父への送金

2022年9月21日（水）13時

恵比寿みずほ銀行外為にていつも通り会の趣旨や内容をしっかりと尋ねられる。

数日前に会自らの口座からドルを引き出すべく予約？し1440 \$分の紙幣（遠方司牧ガソリン代1年分）を受け取った。そのまま井荻イエスのカリタス修道女会に向かう。

ブラジルより数日前にシスター黒崎幸代、シ

スター雲田由喜乃とともに一時帰国されているシスター赤塚洋美とお目にかかるためであった。レオナルド松尾神父（O.F.M.Conv.）に渡すための援助金をシスター赤塚にお預けすることになっていたからで面会。シスターはすでにブラジル宣教50年を過ぎたと仰っていた。シスターとしばし歓談。11月はじめに日本を出てブラジルに戻る予定だとも仰っていた。

コロナにより頓挫していた一時帰国、日本には4年ぶりに帰って来て、改めて日本のごミ

サはしっとりしていて癒されると言われた。そここの緑が綺麗、道路が綺麗とシスターは仰った。

日本入国の時は何か所にもPCR検査やコロナ関連の関所があり、ブラジルを出るときに注射をしたのはなんだか無駄だったのかと少し考えこんでしまったと言われ、聞きしに勝る日本の水際作戦は思ったより厳しいようだった。

2年前亡くなられた、長山武一神父（神言修道会）の後を司牧されている日系の山本伊三男神父のためにレオナルド松尾神父が今回の援助金を願われたようで、山本伊三男神父はこのほど日伯司牧教会会長にもなられたそうだ。

共に働かれる赤塚シスターとレオナルド松尾神父についてのお話になり、神父様は今もオリゾンテという日伯の冊子の編集長として頑張っておられ、リーダーシップがあり、とても頭が冴えているとお話であった。先週メールがあった時神父様は89歳と書かれていた。ブラジルと日本を時々往復していて、その体力に感心してしまう。レオナルド松尾神父のお誕生日

を皆で対面で祝ったばかりと仰っていた。シスター方も同じで、日本で同じお歳だとすっかり老人扱いであり、仕事は殆どしていない。



名簿では何回も見

シスター赤塚洋美

るお名前だったが、シスター赤塚にお目にかかれて本当に良かった。優しく、しっかりしたシスターで帰る時も一度で良いから神父様が元気な内にブラジルにいらっしゃいねとお誘いくださった。仕事から、あちらこちらからは是非いらっしゃいとお誘いを受けるものの、仕事を理由に実現していない。シスターが時間は作るもの是非作っていらっしゃいと重ねて言ってくださり、少し気持ちがかたむきそうになった。

実はそれぞれ遠い国ではなく、すぐそこに宣教師方が沢山働いていることを肌で感じさせられる良い機会であった。送金完了。

（事務局）

クリスマス特集

誕生の地

海外宣教師を支援する会 会長

フランシスコ会 村上芳隆 ofm

9月の初め、休暇を兼ねて福岡市に行きました。まず、司教館にアベイヤ司教様を訪ね、それから出身教会の高宮教会まで歩いて行きました。翌日は早良区にある西新を訪ねました。高校時代の同級生が西新教会の主任司祭として4

月に着任していたからです。地下鉄の西新駅で電車を降りると、サザエさんが目に飛び込んできました。地上出口に向かう地下街の柱には、四季それぞれのサザエさんが描かれています。地上に出ると商店街の入り口が見え、アーケードや街路にもサザエさん一家のキャラクターが溢れています。作者の長谷川町子さんは佐賀県小城郡で1920年に誕生していますが、13才まで福岡市に住んでいたそうです。一家はその後、東京に引っ越しました。しかし、戦争中には福岡市西新の百道に疎開していたとのこ

とです。

昔、百道には海水浴場がありました。1980年代には埋め立てられ、海岸線は再開発されて新たに人工浜が整備され、現在は福岡 PayPay ドームやホテルが並んでいます。疎開していた長谷川町子さんはある日、百道浜を散策している時に漫画サザエさんのアイデアを思いついたとのこと。この百道海岸があった場所の一角が、2007年春には「サザエさんの古里」と認定され、磯野広場と名付けられて記念碑が設置されました。

百道はサザエさん発案の地、つまり、サザエさん誕生の地だったわけです。これは思いがけない発見でした。とういのも、私が西新を訪ねたのは同級生に会うためだけではありませんでした。実は、西新は私の生まれた町でもあったのです。3歳くらいまでしか住んでいなかったもので、ほとんど記憶はありません。家族から聞いていた話では、私の生家は商店街の中にあり、父は当時雑貨店を経営していました。そして、お隣は精肉店だったという事です。同級生が司牧している教会を訪ねるにあたり、自分が生まれた場所が今はどうなっているのか、好奇心から西新の商店街を訪ねてみました。

隣が精肉店という情報だけを頼りに商店街を

歩いていると、大きなビルを見つけました。門柱にあった由来書きによると、このお店は「肉類の＜勉強屋＞」という屋号で、片岡初喜さんが昭和9年に福岡西地区で初となる食肉専門店として創業した、とありました。これを見て、ここが捜していた場所であると私は確信しました。この片岡さんのお陰で、私の家族はキリスト教と出会い、カトリックの洗礼を受けました。片岡さんは恩人だったのです。私の家族の信仰のルーツがここにあります。

ちなみに、わたしの生まれた家はもう無く、今は敷地の一部（門のあたり）になっています。後日、姉にこの話をすると、片岡初喜さんは隣家に生まれた男の子である私を、たいそう可愛がってくださったそうです。その日は思いがけない発見が二つもあり、感慨無量、不思議な気持ちで一杯になりました。ですから訪問した同級生に、この大発見を話さずにはいられませんでした。

クリスマスは救い主であるイエス様の誕生を記念し祝う喜びの日です。そして、私たちがいただいている「いのちと信仰の恵み」に感謝し、味わい、その喜びを分かち合うお祝いの日でもあります。



* ブラジル モジ・ダス・クルーゼス

コンヴェンツァル聖フランシスコ修道会 松尾繁詞

日本は大変な自然条件の中で生きているんですね。しかし、考えてみると、地震、雷、火事、泥棒…。此処には別の形の嵐の中にいるようで

す。今、大統領選挙運動中、党派の争いに殺人も出ます。神殿に仕える者への要求も厳しくなります。巷には、路上生活者が溢れています。食事を求める行列が長くなっています。時々、お祈りください。感謝を込めて

*シエラレオネ

御聖体の宣教クララ修道会 白幡和子

日本に一時帰国されていたシスター白幡は9月23日の夜現地に向けて羽田から出国したものの、経由地トルコでストが行われアフリカに帰る便がすべて欠航となり、一度日本に戻り、出直すことになりました。9月27日帰国、改めて10月3日(月)の夜の便にて再出発しました。

*ハイチ

シュファイユの幼きイエズス修道会 日置マリエ

当小教区の診療所の為に数々の援助を頂いたにも係わらずその後の報告がなされていませんでした。11点の申請件数の内、特に超音波診断装置や分校測光器、血液自動装置などは、患者さんへの素早い診断提供に繋がり充実した医療サービスへの貢献を果たしているようです。支援頂きました事に心から感謝致します。

*チャド ライ

シュファイユの幼きイエズス修道会 平 静代

①チャドは1957年にガールスカウトの活動が始まりました。各教区、各小教区でガールスカウトの活動が存在しています。私達の聖家族小教区教会では、木、日曜日の午後に活動しています。〈目的〉少女と若い女性が自分自身と他の人々の幸福と平和のため責任ある市民として自ら考え行動できる人になれるように。(日本ガールスカウト協会) 同じ目的で活動をしています。このプログラムの背景には、タンジレ県は南に位置し、多くの問題、困難を抱えています。

す。主要道路が整備されていないために雨季には交通が遮断されます。農業以外の地場産業がありません。生活水準が低く、他の県に比べて女性の人口が多いのですが、女子の就学率がとても低く、高等教育を受ける女性はわずかです。早期結婚し、読み書きができない女性が多くいます。女性を取り巻く環境は良くありません。昔から風習、習慣(一夫多妻)男尊女卑で女性は服従、従順が求められます。識字率の低さは女性の自立、自己意識を妨げています。この試みで、多くの女子青年が新しいものに触れて何か感じる体験をして欲しいです。又、〈食〉それは人間共通の欲求です。この活動で衛生指導、飲料水、栄養指導が広がると思います。タンジレ県の女性を取り巻く環境は厳しいですから、この挑戦は期待出来ると思います。

②本会がナザレ寮を初めて27年になります。

現在、小学校聖と中学生が23名と別棟のベタニア寮は9名の高校生、合計32名が寮生活しています。ベタニア寮に隣接して、本会の幼稚園があります。広い敷地内に水汲み手動のポンプ2本があります。ナザレ寮のポンプは10年前に、幼稚園のポンプは8年前に設置しました。2本のポンプは鉄の管です。鉄管の錆で困っています。今回は2本のポンプを腐食しない管に取り替えたいと考えています。この工事をすれば、雨期の間、雨期明けに透明な水が得られます。子どもたちの健康を保つ事ができます。



◇愛のお働きに感謝して

(東京都文京区 スミス 睦子)

◇主の平和と恵が豊かに注がれますように祈ります。(東京都狛江市 飯田 恵美子)

◇いつも感謝し、応援しています。皆様の健康・安全をお祈りしております。

(宮崎県延岡市 重黒木 まゆみ)

◇“きずな”40周年を心からお祝い申し上げます。続けてきてくださった皆様方に心から感謝申し上げます。移住者の為にお盡しなされた梶川宏神父様をお偲び申し上げます。

(東京都世田谷区 山羽 啓子)

◇160号ありがとうございます

(千葉県習志野市 東田 裕子)

◇皆様のお働きに感謝いたしております。有難うございます。少しでもお役に立てば嬉しいです。(千葉県松戸市 萩原 光代)

◇神の栄光のため、又福音の証し人として献身されるシスターの皆様、収束しないコロナ禍の中、異国の地にあってお体にお気をつけて宣教に従事なさって下さい。シスター方を通してより多くの方が神との出会いを体験することができますように。

(栃木県那須町 シトー会那須の聖母修道院)

◇コロナ禍で援助申請が減っているとのこと、複雑な気持ちになります。本当は困難のうちにおられる方が増えているのではないかと思うのですが。助けを必要としていらっしゃる方に機敏に対応していけますように、わずかですが送らせていただきます。感謝と祈りのうちに。

(鹿児島県鹿児島市 岩崎 正幸)

◇祝40周年 (東京都狛江市 平野 律子)

◇日本とは、あまりにも掛け離れた状況の中で

献身的に現地の人々に寄りそって活動されている皆様に感謝申し上げます。

(東京都中野区 篠岡 淑子)

◇新入会員に入れて頂きたい思います。

(東京都目黒区 滝沢 正子)

◇尊敬の思いで通信をよませて頂いています。

(宮城県仙台市 新宮 幸子)

◇コロナが終了しお手伝い出来る事を願っておりましたが残念でなりません。今後きずなの輪が広がる事を願ってお祈りいたします。(元発送担当ボランティア)(東京都世田谷区 南方 恭子)

◇祝40周年 (北海道名寄市 国府 壮)

◇知り合いのシスター(平静代さん)の顔写真を見てなつかしく思い、元気で頑張っている姿にうれしく思いほんの気持ちですが、通信費の一部にでもお使い下さい。

(鹿児島県奄美市 カトリック手花部教会)

◇切手代です。お祈りのうちに

(熊本県熊本市 益田 典子)

◇主の平和 皆様のご活躍、これからもどうぞよろしくお願いいたします。祈りと感謝のうちに (神奈川県横浜市 癸生川 節子)

◇海外宣教者のみな様のお働きに、心から感謝致します。どのような時も、どのような場面も神様からの贈物として、平静がありますように。

(福岡県福岡市 森 由理)

◇主の平和 いつも、おたより有難うございます。皆さまのご健康をお祈りいたします。

(北海道小樽市 櫻井 佳子)



新しい聖霊の照らし

「シノドスの共同体でなければ教会ではない」

マリオ 山野内 倫 昭 さいたま教区司教

私が司教に任命されたさいたま教区の特徴は「ブラジル、フィリピン、ペルー、ベトナムなど、信徒の国籍が多様であること、外国籍信徒の総数は、日本人信徒の5～6倍の、国内では有数の多国籍教区である」ということです。受け入れたさいたま教区では、全く異なる文化を持つ日本に来ることになったラテンやアジアからの人々が安心して暮らしていただけるようにと考え、まず、外国語に堪能な司祭やシスターを数多く招いて、小さな教会であろうとも母国語のミサに与れるようにするとともに、遭遇するであろう生活上の困難に手を差し伸べるべく、早々に国際交流センター（通称：オープンハウス）を立ち上げ迎えることとなりました。

日本の教会の全体としての努力

約30年前から始まった突然の多様な国々からの日本への信徒の移動、移住を迎え、日本の教会全体として受け入れの先頭に立ったのはカトリック難民移住移動者委員会（J-CaRM）でした。委員会の中には外国語司牧（スペイン語、英語、ベトナム語、ポルトガル語と中国語）のセクションが設けられ、毎年、司牧者やリーダーたちの集まる総会が開かれ、司牧の体験や課題の分かち合いを通して、外国籍信徒の司牧は着実に成果を上げてきました。たとえば、日本におられるスペイン語系の方のためにAPALA（Agentes de pastoral latinoamericano）という司牧者チームがあり、毎金曜日に信仰生活を深め共に祈る一時間オンライン放送がパンデミックのときから継続されています。

しかし、少なくともさいたま教区で見る限り、別の見逃せない厳しい現実があります。教会共同体の多くは、「言語や文化の違いを超えた共同体とはならず、堅固な言語共同体の寄せ集めに留まっている」ことです。「言語共同体」が強固にできていて、外部から見ると、一見、「多国籍教会」のように見えているのですが、実は、異なる「言語共同体」の間にはほとんど交わりはない、ましてや、「言語や文化の違いを超えた」共同体にはほとんどなかったということに気づかされたのでした。

「シノドスの言語共同体が別々に併存するだけの教会」から、「多様でありつつ、シノドス的な一つの共同体」を目指して

30年以上の年月を過ごして、アジアやラテンの国から人日本へ移動、移住してこられた方々

の多く、就中、若い世代は、日本語の教育を受けた結果、日本語を話すことができ、苦勞しながらも、それぞれの教会コミュニティに溶け込もうとしています。

そんな背景もあって、さいたま教区では、比較的小さな教会では、パンデミック以前から、言語の違い、文化の違いなどを超えて、共同体全体で主日のミサにも集い、すでに「シノドスの共同体」と呼べるようになり、宗教的伝統や文化の面でも共同体が豊かになっています。しかし、パンデミックになってからは、大きな教会では、感染拡大を避けるため、主日のミサもグループに分れて祝うしか仕方がなくなり、日本人共同体ですら一体性を保つのが難しくなり、シノドスの道から遠ざからざるを得なくなっていると思います。

シノドスの教会のメンバーになろう

わたしたちそれぞれの属する教会が、「多様な共同体の寄せ集め」ではなく、「豊かな多様性を有する一つの共同体」となることを目指す、それがシノドスの教会を目指す道です。イエスが宣言した福音を「共同体として」証しし、受け入れと奉仕の証しによって魅力的な教会になれるよう祈りましょう。(使徒言行録 2・42－47；1 コリント 12・12－14)

喜びと希望に満たされた心によって、さいたま教区司教として選んだモットーを実現していこうと思います。

「キリストのうちに一つのからだ、一つの心となりますように。」(第三奉献文)

担当司教よりのメッセージ

日本カトリック海外宣教師を支援する会の皆さん

主の御降誕おめでとうございます。

「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、

マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。

宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」(ルカ 2.6-7)。

幼子イエスを迎える私たちは今、長く広がるコロナウイルス感染拡大と突然起こされた不条理な戦争という悲しみ、苦しみの真っ只中にあります。そんな時だからこそ、飼い葉桶の中で眠っておられる神の子を受け入れ、人類の和解のために心から祈りましょう。

皆さんの寛大な助けによって海外でイエス様の言葉に従って、日本から様々へ派遣される宣教師たちはもう長年奉仕を続けられています。幼子イエスが皆さんを豊かに祝福し、新しい年を大きな希望を持って迎えることが出来ますように祈ります。

Very happy Christmas and New Year 2023



クリスマスメッセージ

「人の子として来られ 私達の無関心を打ち砕いて
くださったキリストの姿の様に忍耐をもって小さな
人々に寄り添う宣教者の方々にクリスマスのお恵み
がありますように」

新入会員 (敬称略)

個人会員 3名

林田 伸子 (兵庫県神戸市) 王 秀寧 (東京都世田谷区) 滝沢 正子 (東京都目黒区)

事務局より

- ◎コロナとも3年弱付き合って過ぎて参りました。様々なコロナの株があるそうですが、新年には脱コロナの生活を始めたい気持ちでいっぱいです。
- ◎今年一年ご寄付や会費をお送り頂き海外宣教者に代わりまして心から感謝を申し上げます。
- ◎一時帰国の宣教者の方々も宣教地に戻られたことと思いますが、会員の皆様も健康にお過ごしください。
- ◎今年こそ日本の教会も盛んにクリスマスをお祝いしたいものです。良い年末年始になります様に。
- ◎ご家庭に眠っています切手や葉書をお送りください。通信費として大切に使用させて頂いております。
- ◎事務局は12月の24日のクリスマス・イブから新年1月5日までお休みとさせていただきます。

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

〒106-0032 東京都港区六本木4-2-39

Tel. 03-5770-8753 Fax. 03-5770-8754

e-mail kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp URL <http://www.kaigai-senkyo.jp>

- ・銀行振替口座 みずほ銀行高田馬場支店 普通 2084112
日本カトリック海外宣教者を支援する会
- ・郵便振替口座 00140-5-67881 海外宣教者を支援する会